

令和3年度「土砂災害防止に関する絵画・作文」作文小学生の部 最優秀賞  
(国土交通大臣賞)

「今、ぼくたちにできること」

愛知県 春日井市立篠原小学校 6年 <sup>なかにし</sup>中西 <sup>ふみかず</sup>史和

小学3年生の夏休みの自由研究をきっかけに、毎年夏休みには、土砂災害の研究を自分なりに行い、まとめている。今年の夏休みは、小学最後の夏休みであり、土砂災害の研究も集大成とし、約3年間の研究結果を見直すことにした。また、1人でも多くの人の命を救うために、今ぼくたちにできることは何か、今までの研究結果をもとに深く考えたいと思った。

今年の夏休みに土砂災害について研究する上で、確かめたい事があった。それは、市から発行されているハザードマップについてだ。今年配布されているハザードマップは、ぼくが小学3年の時と比べると大きくちがっている点がいくつかあった。近所の川周辺の浸水区域や土砂災害警戒区域も少し変更されていた。年々、夏になると線状降水帯が発生し、長雨が続き、地ぼんがゆるくなっている土地が各地で発生している。それにともない、土砂災害も起きやすくなっている状況だと考えられる。そこで、今年発行されたハザードマップと小学4年の時に作成した自分のハザードマップを照らし合わせ、再度現地を歩いて地ぼんの状況や川の様子を調べてみた。そこで分かった事は、川の草木はのび、川沿いの土手も少しけずれている部分があった。また、自宅周辺のどぶにはゴミやどろがたまっていて、水はけが悪くなっている部分もあった。近年コロナ禍で町内清そうを行う機会も減ったためだと思われる。市のハザードマップを確認することも大切だが、自分で現地を見て、ふ段から危険な場所や避難経路などを再度見直しておく必要があると強く思った。

毎年集中豪雨が起る度、気象庁が「今までに経験した事がない大雨」と表現される。昨年7月、岐阜県をおそった集中豪雨の際、被害にあわれた人も「70年生きてきて経験した事がない」と言われていた。だれもが経験したことがない異常気象だからこそ、日ごろからの備えが重要だと改めて思った。今年の夏休み、昨年被害にあった岐阜県の土地を見ることができたが、今も修復作業が行われていた。その土地を目にした時、災害は本当に怖いと感じたし、大切な人の命が一しゅんで消えてしまうと思うと、言葉に表せない気持ちになった。そのためにもぼくたちは、災害対策に日ごろから意識を高めて、関心を強くもたないといけないと心から思った。

土砂災害について学んだこの約3年間で、実際経験したことがなかったが、今年の8月13日、午後11時ごろ、ぼくが住んでいる地域で警戒レベル4にて避難指示が発令された。眠っていたが、家族みんなで二階へと避難した。前日から家の屋根や雨戸をたたきつける雨や風の音。また線状降水帯も日本にとどまった状態。いつまで長雨が続くのか心配と不安しかなかった。ニュースやネットで川の状況を確認したり、気象庁のキキクルで何度も確認した。そのとき強く思った。約3年間の土砂災害の研究を通して災害への備えが本当に役に立った事だ。また無知のまま経験していたら、きっとあわてただろうし冷静に避難できなかつただろう。何度も家族で避難訓練を行い、避難行動を確認した事が、今回安心へと変わり、大切な家族も守ることができたのだと強く思った。

このように、研究や経験を通して、子供だからこそ今ぼく達にできる事は何か考えた時、土砂災害をふくむ全ての天災に対して、深く考えていかなければならないと思った。まずは先生や友達に土砂災害への関心を広め、近りんの人と協力し助け合いながら災害対策を行っていく必要があると思う。そして、大切な人が悲しむことがないよう、またぼくの夢でもあるドクターヘリでたくさんの命を救えるよう、もっと知識を深め、これからも引き続き土砂災害の研究をしていこうと思う。